

百人一首を覚えよう！ その4（31～40）

31. 朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに 吉野の里に 降れる白雪
(あさぼらけ ありあけのつきと みるまでに よしののさとに ふれるしらゆき)

(坂上是則 (さかのうえのこれのり) 蹴鞠 (けまり) の名手) 「古今集」

32. 山川に 風のかけたる しがらみは 流れもあへぬ 紅葉なりけり
(やまがはに かぜのかけたる しがらみは ながれもあへぬ もみぢなりけり)

(春道列樹 (はるみちのつらき) (～920)) 「古今集」

33. 久方の 光のどけき 春の日に しづ心なく 花の散るらむ
(ひさかたの ひかりのどけき はるのひに しづこころなく はなのちるらむ)

(紀友則 (きのともりのり) (～905頃) = 古今集の選者の一人) 「古今集」

34. 誰をかも 知る人にせむ 高砂の 松も昔の 友ならなくに
(たれをかも しるひとにせむ たかさごの まつもむかしの ともならなくに)

(藤原興風 (ふじわらのおきかぜ) 琴の名手) 「古今集」

35. 人はいさ 心も知らず 古里は 花ぞ昔の 香ににほひける
(ひとはいさ こころもしらず ふるさとは はなぞむかしの かににほひける)

(紀貫之 (きのつらゆき) (868頃～946)
= 「土佐日記」の作者。古今集の選者の一人) 「古今集」

36. 夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを 雲のいづくに 月宿るらむ
(なつのよは まだよひながら あけぬるを くものいづくに つきやどるらむ)

(清原深養父 (きよはらのふかやぶ) = 「日本書記」編者の
舎人親王 (とねりしんのう) の子孫) 「古今集」

37. 白露に 風の吹きしく 秋の野は つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける
(しらつゆに かぜのふきしく あきののは つらぬきとめぬ たまぞちりける)

(文屋朝康 (ふんやのあさやす) = 文屋康秀 (No.22) の子) 「古今集」

38. 忘らるる 身をば思はず 誓ひてし 人の命の 惜しくもあるかな
(わすらるる みをばおもはず ちかひてし ひとのいのちの おしくもあるかな)

(右近 (うこん) 女流歌人) 「拾遺集」

39. 浅茅生の 小野の篠原 忍ぶれど あまりてなどか 人の恋しき
(あさぢふの をののしのはら しのぶれど あまりてなどか ひとのこひしき)

(参議等 (さんぎひとし) (880～951) 源希 (まれ) の次男) 「後撰集」

40. 忍ぶれど 色に出でにけり 我が恋は 物や思ふと 人の問ふまで
(しのぶれど いろにいでにけり わがこひは ものやおもふと ひとのとふまで)

(平兼盛 (たいらのかねもり) (～990) 村上天皇の歌合せ会での優勝者) 「拾遺集」

